

第二百六十六話 酸素魚雷の数奇な運命！

日本の傑出した兵器の一つに、九三式酸素魚雷がある。雷跡がクッキリと残り回避可能な空気魚雷に比べれば、雷跡は残らず、射程も二万 KM、爆薬量も五百 kg という優れものだった。この魚雷が戦争初期にはそれなりの成果を挙げた。が次第に活躍の場もなくなり、戦争末期には、特攻人間魚雷「回天」と化する。その状況を摘記する。



1 初期進攻作戦時のジャワ攻略作戦時のスラバヤ沖・バタビア沖海戦

英軍極東拠点たるシンガポール陥落後の攻略目標は、蘭印ジャワであった。大本営は、今村中将麾下の第 16 軍を東部及び西部の両方面からジャワに上陸させることを企図し、夫々に海軍護衛部隊が協同した。上陸日は、2 月 28 日とされた。

この上陸作戦の海上護衛部隊と米英蘭豪四国艦隊が激突したのが、スラバヤ沖海戦 (1942/2/27) 及びバタビア沖海戦 (1942/3/1) である。

東部ジャワ攻略部隊を護衛するのは、第三艦隊 (第二、四、五の水雷戦隊等計 67 隻)、これを迎撃するのは、蘭海軍将官を長とする連合軍であり、勢力はほぼ拮抗していた。

第一次・第二次昼戦、第一次・第二次夜戦と 46 時間に亘る戦いの中で、魚雷 121 本発車したが、不具合が多くて命中 1 発と低く、砲弾の命中率も非常に低かった。

引き続き行われたバタビア海戦では、魚雷攻撃に成果はあったが友軍相撃 (同士討ち) の悲劇が起きた。(第二百五十一話 参照)

2 伊号潜水艦の快挙 (1942/9/15)

ガダルカナル戦において、伊号潜水艦から発射された 6 発の酸素魚雷の長距離駆走により、戦艦 1 隻大破、航空母艦撃破、駆逐艦撃沈の戦果を挙げた。

3 ルンガ沖夜戦 (1942/11/30 夜)

第二艦隊・第二水雷戦隊によるガダルカナル島への輸送任務 (鼠輸送) 中、それを阻止すべく襲いかかる米艦隊の艦隊決戦である。わずか十六分間で勝敗の決した戦闘である。しかも、大東亜戦争を通じて日本海軍が完勝した最後の海戦になった。この立役者は酸素魚雷であった。米重巡 4 隻のうち 1 隻を撃沈、3 隻を大破させた。

4 酸素魚雷のその後 出番なく、華々しい戦果を挙げる機会なく、兵器庫で惰眠。

5 酸素魚雷の問題点 幾つかの問題点が指摘されている。

- (1) ジャイロスコープの不調による迷走
- (2) 誘導装置の欠如による遠距離攻撃における命中率の低下
- (3) 爆薬量や信管の問題もある由。

実戦使用する前に十分な実用実験を行ったのだろうか？ゲームチェンジャーにも為り得た筈だ。後知恵かも知れぬが、あと一步の改良 (探知・誘導装置) が惜しまれる。それが日本の限界か？

6 特攻兵器「回天」への転用

本魚雷は数奇な運命を辿り、最終的には特攻兵器に転用された。

九三式魚雷を改善して、潜水艦に外部搭載し、特攻兵器とするため・ジャイロスコープの改善、・爆薬量の大幅増加、・長さを 9.61m から 14.75m へ ・重量を 8.3t に ・水深 80m への耐圧性能 ・航続距離の増大 ・水面下低速安定走行性能の向上

420 機生産された。初の実戦投入は 1944/11/20 のウルシー環礁奇襲であり、当初は泊地攻撃に運用されたが、米の防潜網が設置されるに従い、敵艦隊への攻撃に運用された。特攻隊「菊水隊及び金剛隊」が編成された。回天特攻隊員の戦死者 106 名である。合掌

(了)